

「自己表現活動」を取り入れた英語授業

田中武夫／田中知聡 著

青木昭六

(愛知学院大学教授)



本書は、自己表現能力の養成に取り組む努力を積み重ねている人には滋味に富む強壯剤となり、軽々に「実践的コミュニケーション能力の育成」とか宣っている人には毒消しの煎じ薬として飲んででもらいたい内容に溢れている。自己表現活動を「学習者が自分自身で考えて、あるいは自分の頭を悩ませた内容をやりとりする自己介入度の高い活動」と定義し、その意義を「他律規制から自律規制への質的変容を促し、より高次で豊かな精神活動を可能にしてくれる媒介道具として捉え直すこと」に見出している。この理念を実践に具現化することは易々とできることではない。その手引きを目指す本書は次のように章立し、第2～4章に全体の4分の3を、中でも第3章と第4章には全体の2分の1強のページをあて、モデルを示している。

- 第1章 表現意欲を中心にするれば授業は変わる
- 第2章 表現意欲を高める言語活動の工夫
- 第3章 自己表現に必要な力の育成
- 第4章 自己実現活動を取り入れた授業モデル
- 第5章 自己表現力を育成する評価

ヴィゴツキーは『言語と思考』の中で、ことばと表現される思想との関係を「雨と雨を降り注ぐ雨雲」に例え、その思想を生む動機を「雲を動かす風」と呼んでいるが、この雨、雨雲、風の三者の関係を本書では①自己表現活動、②自己表現能力の活性化、③表現意欲を高める言語活動の工夫と捉え、①のために②③のあるべき姿について、適切な例を豊富にあげ、それを活かす方法について、熱っぽく、粘っこく語りかけていると言えよう。②③は学習者自身の環境、知識、経験、目的や願望に直接関わっていて個性的で個別的であり、外部から一様に設定するのには馴染まないとい

う性格の強いものである。その困難点の打開に、②では、自己発見、自己実現、自己の価値観の表明を行う基盤となる信頼感、感受性、想像力、英語力を高める方法を提案し、「生徒の持っている潜在的な思いや貴重な体験を活性化し、動機づけをし、チャレンジする場を提供する仕掛け人としての教師の役割」を強調する。これを受けて、③では、必然性、具体性、自己関連性、自由度を高める実践例が周到に提示されている。本書はまさに著者の「自己表現」の結晶である。

本書の「自己表現活動」は主に伝統的な「提示―練習―産出」の指導過程の産出活動であり、task-supported という性格を持つが、task-based という性格の自己表現活動の研究も本書に触発されて進むことを期待したい。

言語教育学入門

——応用言語学を言語教育に活かす

山内 進 編著

安田絹子

(沖縄県立那覇高等学校教諭)



『言語教育学入門』は、大学の応用言語学関係クラスの入門用テキストとして編纂されたものですが、中学・高校の英語教師にも大変に興味深い内容になっています。編著者の山内氏が、本書は、言語と人間の関わりについて研究する学問である応用言語学と、応用言語学を活用した言語教育分野を紹介することであると述べていますが、本書を手にする読者は、言語教育がいかに広範な領域を研究対象としているかが理解できると思います。

言語は人間が日常的に使う人間生活の要であり、人間生活を円滑に行うための必須ツールです。普段は何気なく使っている言語ですが、本書では、様々な観点から言語に焦点を当て、我々の使う言語について考えるきっかけを与えてくれる本です。本書は、主に米国の大学院で学位を取った沖縄県内の大学や中学・高校の教師が、それぞれの専門分野について解説をしてい

て、応用言語学全般についてひと通り理解できるようになっています。

各章の最後に「演習問題」がついていますが、各章の内容の再確認はもちろんのこと、様々な問題について考えさせ、論じさせ、発展させる意味でも役に立ちます。また、それぞれの分野における研究テーマを設定する際のヒントも得られると思います。巻末の「応用言語学・言語教育学小辞典」は、言語教育に必要な用語の解説を簡潔にまとめてあり、少ないページながらも、充実した内容となっています。

私は、英語教師として英語を教える立場から、本来なら言語に関する予備知識を十分に蓄えて、生徒を教育していく必要があると考えています。しかし、日頃の学校現場の忙しさゆえ、なかなか言語そのものについて、多面的な立場から考える時間がとれません。そんな時に本書を手にし、改めて、言語をめぐる様々な論説に新たな興味を抱き、言語教育について考える貴重な機会を得られました。

本書で取り上げられている「言語と社会、異文化コミュニケーション、言語と文化、通訳・翻訳、言語とジェンダー、言語習得」などのテーマは、中・高の英語のテキストにも様々な形で取り上げられていますし、その他のテーマも英語教育に関係のある興味深いものとなっています。応用言語学という観点から、言語教育学の重要性を説く本書は、中学や高校の英語教師にとって必読書と言えるでしょう。手元に置いて大いに活用したい1冊です。

[例解] 現代英語冠詞事典

樋口昌幸 著
マイケル・ゴーマン協力

境 倫代
(京都教育大学附属高等学校教諭)



英語教員であれば誰でも次のような質問を受けた経験があるだろう。

① coffee は water と同じ液体なのに、どうして two

coffees と言えるのか。

② Time is money. の time は無冠詞なのに、どうして

I had a good time at the party. では a がつくのか。

③ This is a book which I bought yesterday. の book は関係詞節で限定されているのに、どうして the ではなく a がつくのか。

私も職業柄、冠詞に関する上記のような事象についてはその都度、何らかの解決を求めてきた。しかし、個々の事実に対するばらばらの説明ではなく、もっと多くの事実当てはまる共通性のある説明ができないものかと常々もどかしさを感じてきた。本書はそのようなもどかしさを見事に解消してくれる解説書である。

本書では、一見ばらばらに見える冠詞の用法について、第1部で不定冠詞使用の条件を、第2部で定冠詞使用の条件を極めて簡潔に解説している。その解説を凝縮すると次のようになる。

不定冠詞：不定冠詞は名詞部が完結を表すときに用いられる

定冠詞：定冠詞は名詞部が同定可能と判断されるときに用いられる。

不定冠詞の「完結」とは、限界を表わし、他との区別可能であること、すなわちそれ自体がまとまった姿かたちを有することを意味する。本書では、この「完結性」を「意味」「姿かたち」「働きと個体」「範囲の限定と非限定」「抽象概念と個別事象」「複数名詞」の6つの視点からとらえ、一見膨大に見える不定冠詞の用法を明解に分析している。一方、定冠詞の用法については、従来の文法書では「既出の名詞」「唯一の物事」などとばらばらな事実として解説されていたが、本書では「同定可能性」という大きな1つの視点からとらえているので非常に理解しやすい。

このように、本書が提供してくれる原理は多くの事実を説明してくれるので、学習者の負担が軽くなる。また、本書はその理論と原理を例証するために、膨大な例文が、不定冠詞、定冠詞、無冠詞の例を対比させる形で提示されている。これもまた学習者の理解を大いに助けてくれる。したがって、本書は、「学習者に優しい解説書」といえるのではないだろうか。もちろん、学習者だけではなく、英語教員にも「頼れる1冊」であることは間違いない。